

Title	コスモスのありか/主要研究資料
Sub Title	Selected bibliography
Author	後藤, 文子(Goto, Fumiko)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2014
Jtitle	Booklet Vol.22, (2014.) ,p.164- 192
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Cosmos 5
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000022-0164

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

コスモスのありか／主要研究資料

後藤文字編

A. 大野一雄（1906-2010 舞踏家）

1) 著述

a. 単行書

『御殿、空を飛ぶ — 大野一雄 舞踏の言葉』思潮社、1989年

『dessin』緑鯨社、1992年

『大野一雄 稽古の言葉』フィルムアート社、大野一雄舞踏研究所編、1997年

『大野一雄』書肆青樹社、1997年

『大野一雄 魂の糧』フィルムアート社、大野慶人+大野一雄舞踏研究所、1999年

『大野一雄 石狩の鼻曲がり — 石狩川河口公演記録集』かりん社、2002年

『私の舞踏の命 吉増剛造による大野先生への献詩：細江英公による大野先生への献写真』矢立出版、2005年

b. 定期刊物

「文化 幕があき “81歳の作品” 肉体で表現？世界をまたに舞踏人生」『日本経済新聞』1988年8月16日

「私のなかの歴史」10回連載『北海道新聞』1997年2月17日-28日

2) 対談・鼎談・インタビュー

「『死海』の水 対談：大野一雄・吉増剛造」[特集 舞踏・身体・言語]（対談者：吉増剛造）『現代詩手帖』第28巻第6号、1985年5月、53-68頁

「踊る場は母の胎児 異なる二つのいのちを一つに感じて」ダンサー大野一雄さんが語る “肉体表現” 『十代の会』第4巻第12号、1984年12月

「白石かずこの Talking Theater 5 ゲスト=大野一雄（舞踏家）」（対談者：白石かずこ）『あんさんぶる』第233号、1986年5月1日

「大野一雄 ロングインタビュー 84歳、魂揺する渾身の舞」『日本経済新聞』1991年10月12日

「生命宇宙を語る 舞踏家『大野一雄・87歳』大野一雄との対話 大野一雄 vs 岡本章」（対談者：岡本章）『アサヒグラフ』3・4月号、1994年3月1日

「クロスオーバー談義 『宇宙と遊ぶ』大野一雄・慶人&金満里」（鼎談者：大野慶人、金満里）『KSK イマージュ』第5号、1995年12月号

「大野一雄 vs 日芸生 鼎談 大野一雄×大野慶人×中村文昭 命の舞踏・その喜び」（鼎談者：大野慶人、中村文昭）『江古田文学』第31号、江古田文学会、1996年11月15日

「大野一雄 舞踏家×吉増剛造 詩人」（対談者：吉増剛造）『FRONT』1999年8月

「大野一雄 インタビュー」（インタビュアー：平林享子）『太陽』第479号、2000年9月

3) 写真集

『胡蝶の夢 舞踏家・大野一雄 — 細江英公人間写真集』細江英公写真、大野一雄舞踏、白石かずこ詩、澁澤龍彦文、青幻舎、2006年

4) 映像記録資料・映画

- 『あんま』（監督：飯村隆彦）1963年
『バラ色ダンス』（監督：飯村隆彦、出演：土方巽、大野一雄）1965年
『O氏の肖像』（監督：長野千秋）1969年
『O氏の曼陀羅 遊行夢華』（監督：長野千秋）1971年
『O氏の死者の書』（監督：長野千秋）1975年
『舞台リハーサル』（監督：ヴェルナー・シュレーター）1981年
『Just Visiting the Planet』（監督：ペーター・ベンセル）1981年
『魂の風景』（監督：平野克己）1991年
『彼岸から』（出演：大野一雄、吉増剛造、荒木経惟）1994年
『書かれた顔』（監督：ダニエル・シュミット、出演：大野一雄、坂東玉三郎）1995年
『KAZUO OHNO』（監督：ダニエル・シュミット、出演：大野一雄、大野チエ）1995年
『大野一雄 1977-1999』（池上直哉写真集、CD-ROM）、2000年
『御殿、空を飛ぶ』（制作・監修：大野慶人、大野一雄）2000年
『大野一雄 美と力』[DVD] 大野一雄舞踏研究所企画・監修、NHKソフトウェア、2001年
『001001 松澤宥 + 大野一雄 コラボレーション』（監督：大木裕之）、桜華書林、2001年
『親切な神様、ベニス 1999年9月（“O, kind god!” Venice, September 1999）』[DVD]（監督：ジャンニ・ディ・カプア）、2003年
『KAZUO OHNO & O氏の肖像』[DVD]（監督：ダニエル・シュミット、長野千秋）2004年
『ひとりごとのように』（監督：大津幸四郎、出演：大野一雄、大野慶人ほか）2006年
『大野一雄 ロングインタビュー』大野一雄舞踏研究所協力、NHKエンタープライズ、2006年
『御殿、空を飛ぶ — 大野一雄 「赤レンガ倉庫」 舞踏公演』大野慶人制作・監修、2007年
『大野一雄 花 天空散華 いけばな作家・中川幸夫の挑戦』NHKエンタープライズ、2010年

5) 定期刊行物特集号

- 『四次元通信』「特集 舞踏・大野一雄」第59号、矢立出版、1992年4月
『Prints (プリント21)』「特集 閉じ込められた男の肉体」第39号、1995年11月
『現代詩手帖』「特集 大野一雄 詩魂、空に舞う」第54巻第7号、2011年7月

6) そのほか

- 『大野一雄 百年の舞踏』大野一雄舞踏研究所編、フィルムアート社、2007年
『大野一雄 百歳の年』溝端俊夫編、BankArt1929、2007年
『大野一雄 フェスティバル2008』溝端俊夫編、BankArt1929、2008年
『大野一雄年代記 1906-2010』大野一雄舞踏研究所編、かんだ、2010年
『大野一雄・舞踏と生命 大野一雄国際シンポジウム2007』岡本章編、思潮社、2012年

B. 洲之内徹（1913-1987 文筆家・コレクター・画廊主）

1) 著書

- 『橐の木の下』現代書房、1966年
『絵のなかの散歩』新潮社、1973年
『気まぐれ美術館』新潮社、1978年
『セザンヌの塗り残し』新潮社、1983年
『洲之内徹小説全集 全2巻』東京白川書院、1983年
『人魚を見た人』新潮社、1985年
『さらば気まぐれ美術館』新潮社、1988年
『気まぐれ美術館』（新潮文庫）新潮社、1996年
『絵のなかの散歩』（新潮文庫）新潮社、1999年
『帰りたい風景』（新潮文庫）新潮社、1999年
『芸術随想 おいてけぼり』世界文化社、2004年
『芸術随想 しゃれのめす』世界文化社、2005年
『洲之内徹文学集成』月曜社、2008年

2) 小説

- 「渦紋」『月刊 四国文化』愛媛新聞社、1947年11月号
「鳶」『文學草紙』新文化社、1948年6月号
「短夜」『月刊 南海』愛媛新聞社、1948年12月号
「雪」『文學草紙』新文化社、1949年2月号
「橐の木の下」『群像』講談社、1950年1月号
「砂」『中央公論』中央公論社、1950年11月号
「雨の中」『読物朝日』1951年1月号
「掌の臭ひ」『文學界』文芸春秋新社、1951年3月号
「妻の花」『労働文化』労働文化社、1955年、第6巻第12号
「桜のある風景」『新日本文學』新日本文学会、1955年8月号
「終わりの夏」『文學界』文芸春秋新社、1961年12月号
「流氓」『文學界』文芸春秋新社、1962年4月号
「ある受賞作家」『新潮』新潮社、1966年6月号
「雨の多い春」『文學草紙』文学草紙社、68号、1970年

3) 放送劇

- 「信夫の笛」松山中央放送局、1951年11月3日放送
「樹氷」（一幕二場）松山実験劇場、1952年6月上演／松山中央放送局、1952年11月1日放送
「燕」松山中央放送局、1952年10月21日放送
「金魚」松山中央放送局、1954年8月21日放送
「春雷」松山中央放送局、1954年
「赤い眼鏡」南海放送、1956年4月23日放送
「流れる水のように」NHK放送、1956年7月11日放送
「蟬」松山中央放送局
「町の中の川」松山中央放送局

4) 随筆・評論

- 「僕の弟」『樂園』（発行人：竹内成一）第5号、1925年
「批評精神と批評家根性と」『素描・Ⅲ』（松山文芸倶楽部）（投稿名：市河三夫）
「僕たちの主張（上）」『南海新聞』1936年10月28日
「僕たちの主張（下）」『南海新聞』1936年10月29日
「石が沈んで木の葉が流れる」『愛媛新聞』1946年9月23日
「絶望の美学」『愛媛新聞』1947年1月4日
「死人の資格」『愛媛新聞』1947年2月3日
「灯の色」『愛媛新聞』1948年2月1日
「絶望は死者のものであるか」『愛媛新聞』1948年4月8日
「蜚」『愛媛新聞』1948年6月19日
「文学への固執」『月刊四国文化』愛媛新聞社、1950年2月号
「『民衆』と『住民』カミュ『ベスト』について」『愛媛新聞』1950年4月23日
「夏の随想 ごぼうの汁」『愛媛新聞』1950年8月2日
「爪を切る」『愛媛新聞』1950年10月1日
「映画『始めか終りか』 入選感想論文 ヒューマニズムの算術」『愛媛新聞』1950年11月5日
「いたち・おうむ」『愛媛新聞』1950年11月17日
「雪女」『愛媛新聞』1952年1月1日
「そのころの私」『愛媛新聞』1952年2月5日
「木を植える願い」『愛媛新聞』1952年3月3日
「高校生の作文から」『愛媛新聞』1952年4月19日
「鶴のいる診察室」『吉高新聞』第5号、1952年7月
「尾崎安四の死」『愛媛新聞』1952年7月22日
「見世物奇譚」『愛媛新聞』1953年1月4日
「花祭り」『開発タイムス』1953年4月20日号
「穴を掘る」（「8月15日と私」シリーズ）『愛媛新聞』1955年8月14日
「銭亀」『愛媛新聞』1956年4月27日
「『ミラボオ橋』の詩」『愛媛新聞』1956年5月30日
「魯迅の鼻」『中央評論』（中央大学 中央評論編集部）第8巻第6号、1956年
「銀座のデコちゃん」『劇作2時會通信』（劇作2時會）第4号、1956年6月
「岡本鉄四郎帰る」『愛媛新聞』1956年7月3日
「お城山今昔」1-5（連載）『愛媛新聞』1957年5月31日、6月1・3・4・5日
「新春雑談 珍コレクション物語 — マニアでもこればかりは」『別冊週刊サンケイ』1960年2月1日
「雑談油絵経済学」『日本百科大事典 別冊』[世界の美術 個展編] 小学館、1964年12月
「青年美術家集団のこと 現代美術家集団のこと」『愛媛新聞』1965年1月20日
「忘れ得ぬコレクターふたり」『藝術新潮』1967年8月号
「まぼろしの絵との対面」『藝術新潮』1968年1月号
「作家登場・長谷川瀧二郎」『みづゑ』1968年6月号
「岩崎英二の死」『追悼 岩崎英二』（『劇作2時會通信』第106号）劇作2時會、1968年8月1日
「異色の画家 小茂田守介」『画家』第4号、新具象研究会、1968年9月号

「逆説的な抒情」『森堯茂彫刻展リーフレット』1968年
 「『Y市の橋』のいきさつ」『藝術新潮』1969年2月号
 「異色の画家 吉岡憲」『画家』第6号、新具象研究会、1969年4月号
 「『鬘光』になりたかった男」『藝術新潮』1969年6月号
 「北陸に埋もれた鬼才 佐藤哲三」『藝術新潮』1969年12月号
 「遺作展で感じたこと」『第1回県人作家秀作美術展 佐藤哲三 ― 日と作品図録』
 新潟県美術博物館、1970年
 「岡さんの胡瓜」『人類の美術サロン』第11号、新潮社、1970年3月号
 「輸入洋画は売れるというが」『藝術新潮』1970年5月号
 「波の音」『藝術新潮』1970年9月号
 「墓堀人足の奇蹟」『求美』1970年9月号
 「流しの上の哀歎」『文學草紙』第69号、文學草紙社、1971年
 「孤独な水彩画」『藝術新潮』1972年3月号
 「イシアタマの弁 高良真木について」『美術ジャーナル』1973年1月号
 「金魚鉢に入った猫」『藝術新潮』1973年2月号
 「無名の画家の孤独な死＝佐藤清三郎のこと」『サンケイ新聞』1973年7月13日
 「〈秘蔵4〉浜松市立美術館のガラス絵コレクション」『藝術新潮』1973年10月号
 「無名であること 佐藤清三郎について」『美術ジャーナル』1973年10月号
 「四方田草炎さんのことで私の言いたいこと」『美術ジャーナル』1973年12月号
 「斎藤和雄 その作品から」『アトリエ』1974年4月号
 「私の美学5 会話について」『日本美術』日本美術社、1974年11月号
 「わがこころの風景『松山』」『日本美術』日本美術社、1975年9月号
 「夭逝ということ」『アート・トップ』1975年12月号
 「あいまいな記憶または記憶のあいまいさ」『季刊えひめ』「特集 伊丹万作追悼
 号」第4号、松山文化団体連絡協議会、1976年9月号
 「谷中界限（美術メモ）」『三彩』1977年9月号
 「池田亀太郎の肖像画」『三彩』1977年11月号
 「「気まぐれ美術館」こぼれ話」『波』新潮社、1978年8月号
 「柳瀬正夢ノート」『柳瀬正夢遺作展図録』愛媛県美術館、1978年
 「コレクション考」『絵はもう一人の人間 日本洋画の巨匠・異才展図録』愛媛新
 聞社、1979年
 「コレクション考 ― なぜ『絵のなかの散歩』展なのか」『洲之内徹コレクシ
 ョン 絵のなかの散歩図録』香川文化会館、1979年
 「コレクションでないコレクション」『洲之内徹の発見 ― 絵のなかの散歩図録』
 高岡市立美術館、1979年
 「お粥とビール」『土方定一追想集』土方定一追想集刊行会、1981年
 「信州のイメージ『藤村から槐多』」『信濃毎日新聞』1982年4月16日
 「おいらん丸鉄砲州発航」『木村莊八全集月報2』講談社、1982年
 「しゃれのめす」『朝井閑右衛門追想集』朝井閑右衛門追想集刊行会、1984年
 「根っからの絵かき ― 松田正平」『芸術新潮』1984年7月号
 「浅尾さんのクンショウ」『叙勲記念 浅尾丁策油彩展』東邦画廊、1986年
 「モダンジャズの森に迷う」『日本経済新聞社』1986年2月5日
 「『隅田川絵巻』雑感」『別冊 太陽』「特集 モダン東京百景」第54巻、1986年
 「ヒトバンヂュウフイタカゼ」『小野木学 最後の絵日記』新潮社、1986年

「風の島」『軍艦島 ― 棄てられた島の風景 雑賀雄二写真集』新潮社、1986年
「赤は赤、緑は緑 ― 絹谷幸二」『芸術新潮』1987年7月号
「松田正平の世界」『松田正平展図録』山口県立美術館、1987年10月
「見事だった和紙の赤旗」『芸術新潮』1987年10月号
「小野元衛と志村さん」『小野元衛の展覧会リーフレット』ギャラリーこちゅう
きよ、1987年10月
「ちょっと恐ろしい人」『小茂田公雄画集』小茂田公雄画集刊行会、1987年
「馬越さんの思い出」『馬越舛太郎作品集』馬越舛太郎画集刊行会、1987年

5) 展覧会評・映画評・書評

「美校卒業制作展 建築・工芸」『アトリエ』アトリエ社、1932年5月号
「二つの資質 西澤、芝小品展評」『愛媛新聞』1948年6月20日
「版画展評」『愛媛新聞』1949年9月18日
「『忘れられた子等』を見て」『愛媛新聞』1949年10月9日
「自立演劇運動の現状 演劇発表会審査員合評」『愛媛新聞』1949年11月10日
「『オリゾン展』での走り書き」『愛媛新聞』1950年11月23日
「『油絵と民藝』西澤富義、阿部祐工二人展評」『愛媛新聞』1952年1月13日
「抽象と抒情 青井辰雄展に寄せて」『愛媛新聞』1952年8月19日
「観念的と叙情的（青井辰雄・真鍋博 二人展）『愛媛新聞』1957年4月4日
「風の吹きとおる彫刻 ― 日比谷公園「野外展」を見て」『愛媛新聞』1957年5
月23日
「美しい白と青 三輪田俊介個展によせ」『愛媛新聞』1969年4月14日

6) 対談・鼎談・座談会

「アメリカ交響楽を見て」『愛媛新聞』1947年11月7日
「『青い山脈』座談会（出席者＝岡田禎子、洲之内徹、光田稔、高橋丈雄、伊勢野重任）『愛媛新聞』1949年7月7日
「愛媛美術展をみて」（出席者＝森本憲夫、吉田橙子、洲之内徹、三戸昌資）『愛媛新聞』1950年11月3日
「掘り出された書家“米山”」（出席者＝山本発次郎、景浦雅桃、平山徳雄、森山章、洲之内徹、田中宗担）『愛媛新聞』1950年11月28日
「中国の新しい人間像」（出席者＝竹内好、田村泰次郎、佐々木基一、洲之内徹）『群像』講談社、1951年5月号
「素晴らしい“色彩描写”英映画『黒水仙』の合評会（出席者＝伊勢野重任、洲之内徹、三好日出夫、河本一男、光田稔）『愛媛新聞』1951年5月2日
「郷土三作家 文学放談」（出席者＝岡田禎子、白川渥、洲之内徹）『愛媛新聞』1951年10月13日
「小説の将来 古谷綱武・洲之内徹対談」『愛媛新聞』1951年11月19日
「『風雪二十年』をみて うまい記録の挿入 足りない突っこみ」（出席者＝洲之内徹、坂本忠士、伊勢野重任、平田節子）『愛媛新聞』1951年11月23日
「進撃を語る 山本安英さんとぶどうの会を囲んで」（出席者＝山本安英、木下順二、桑山正一、久米明、小沢重雄、北京子、岡田禎子、洲之内徹、仙波武男、仲田庸幸、光田稔）『愛媛新聞』1951年12月8日
「版画を語る 川西画伯を迎えて」（語る人＝川西英、洲之内徹、小茂田公雄）『愛媛新聞』1952年6月7日
「現代美術の意義・見方」（出席者＝中村伝三郎、森堯茂、洲之内徹〔司会〕、小泉政孝、岡本鉄四郎、松本須賀子、高本鉄之介、工藤省治、林俊昭）『愛媛新聞』1963年3月30日

「ジャーナル放談」（出席者＝洲之内徹、美津島徳藏、川辺敏哉）『美術ジャーナル』美術ジャーナル発行所、1973年4・5月号

「黒江光彦著『フランス中世美術の旅』』『波』新潮社、1982年11月号

「美を語る 古賀春江」（対談者＝阿部信雄）『アート・トップ』芸術新聞社、1986年4・5月号

7) 連載

「気まぐれ美術館」『愛媛新聞』1962年12月3日から1964年3月23日まで 全33回

「気まぐれ美術館」『藝術新潮』1974年1月から1987年11月まで 全165回（休載：1984年4月、1987年6月）

「山のとびら」連載『アルプ』創文社、1974年11月から1979年10月まで 全58回（休載：1976年4月、1978年12月）

「私の愛する美術品」連載『POECA』ポーラ、1976年夏（第9巻2号）から1977年冬（第10巻4号）まで 全7回

8) 同人誌

『記録』記録社、1936年8・10・12月、1937年2・4・9・11月、1938年4・7月号

『四國文学』（『記録』改題）1939年5・6月、1951年4月

『記録』（再刊）1940年4・10月

『文脈』1952年1・4・11月、1954年10月、1955年2月、1957年1・7・12月、1961年8・12月、1966年5月

9) 展覧会図録

『洲之内コレクション展 気まぐれ美術館』宮城県美術館編集・発行、1989年

『美術館散歩Ⅱ・洲之内コレクション』宮城県美術館編集、宮城県美術館協会発行、1989年

『日本の洋画・その情熱と衝突 洲之内・井部コレクション展』町立久万美術館編集・発行、1990年

『気まぐれ美術館 洲之内徹と日本の近代美術』目黒区美術館ほか編、朝日新聞社発行、1997年

『宮城県美術館所蔵 洲之内コレクション 気まぐれ美術館』三重県立美術館編集、(財)三重県立美術館協会発行、2000年

『気まぐれ美術館 洲之内コレクション展』茨城県近代美術館編集・発行、2005年

『洲之内徹と新潟』砂丘館編集・発行、2007年

『セキ美術館増床記念 洲之内徹とゆかりの画家たち 絵の中の散歩』セキ美術館発行、2009年

『洲之内徹と現代画廊 昭和を生きたと精神』宮城県美術館（和田浩一・加野恵子・小檜山祐幹・菅野仁美）ほか編集、NHKプラネット東北発行、2013年

C. 中川幸夫（1918-2012 華道家）

1) 著書

『中川幸夫の花』求龍堂、1989年

『花のおそれ』（村上直之と共著）、誠文堂新光社、1992年

- 『はながらす』ギャラリー無有、1993年
 『魔の山 中川幸夫作品集』求龍堂、2003年
 『花人中川幸夫の写真・ガラス・書 — いのちのかたち』三上満良・安藤輝美編、求龍堂、2007年
 『時空にあれ』『三輪和彦 無想の地』展図録、ギブリエ編、1989年
 『内藤廣 構造の神秘、構造の詩学』『迷宮都市 新しいリズムの建築家たち』展図録、セゾン美術館編、1993年

2) 対談・インタビュー

- 『捧ぐ花・五景』『太陽』第34巻第12号、1996年11月、9-15頁
 『語る・中川幸夫の世界『花は野にあるように』』（インタビューア：川村二郎）『朝日新聞』1999年7月14日
 『中川幸夫 造型感覚と自然の造形』『太陽』第38巻第1号、2000年1月号、132-135頁
 『中川幸夫』『空間演出デザイン』京都造形芸術大学編、角川書店、2000年3月
 『中川幸夫（いけばな作家）いける人の精神がいきているかどうか』『太陽』第38巻第9号、2000年9月、56-61頁
 『インタビュー 中川幸夫 花は、日々歳々、咲きつづける』（インタビューア：内田真由美）『美術手帖』第52巻第794号、2000年10月、108-114頁
 『贅沢に近づく』（対談者：中村雄二郎）『現代芸術の戦略 [中村雄二郎対話集]』中村雄二郎著、青土社、2001年

3) 定期刊行物特集号

- 『かたち magazine for crafts & artware with life』「特集 時代を活ける、花一輪 — 中川幸夫、七代清水六兵衛の花器に活ける」復刊第5号（通巻第17号）、1988年春
 『美術の窓』「特集 中川幸夫の仕事」第8巻第12号、1989年12月
 『季刊 銀花』「特集 花人・中川幸夫の地・水・花・風・空」第86号、1991年夏
 『美術手帖』「特集 花狂人 中川幸夫」第52巻第794号、2000年10月

4) 展覧会図録

- 『花楽 中川幸夫展』竹内啓子編、銀座自由が丘画廊、1984年
 『無言の凝結体 中川幸夫展』自由が丘画廊、1987年
 『墨五人展』草月会文化事業部編、草月会、1989年
 『ばけるほのお』彩陶庵、1989年
 『中川幸夫展 墨風白雨』双ギャラリー、1990年
 『Masudaya 1990』マスダプランニングスタジオ編、マスダプランニングスタジオ、1990年
 『掌（て）の中の宇宙』手で見るギャラリーTOM編、手で見るギャラリーTOM、1991年
 『花淫 さくら』ギャラリー小柳、1997年
 『第20回オマージュ 瀧口修造 中川幸夫 献花オリープ』佐谷画廊編、資生堂企業文化部・佐谷画廊、2000年
 『誘いの夢…中川幸夫』エルメスジャポン、2003年
 『中川幸夫 魂の花展 — 青竹ひらく霧島』中村真由美編、鹿児島霧島アートの森、2003年
 『有隣荘 中川幸夫・大原美術館』大原美術館編、大原美術館、2004年
 『花人 中川幸夫の写真・ガラス・書 — いのちのかたち』三上満良・安藤輝美

編、宮城県美術館ほか、2006年
『内臓感覚 ― 遠クテ近イ生ノ声』赤々舎、金沢21世紀美術館、2013年

5) 映像資料

『大野一雄 花×天空散華 いけばな作家・中川幸夫の挑戦』[DVD] かんた、2010年

D. 土方巽 (1928-1986 舞踏家・振付家)

1) 著述

『犬の静脈に嫉妬すること』[叢書溶ける魚 No. 4] 鶴岡善久・政田岑生編、湯川書房、1976年

『病める舞姫』白水社、1983年

『美貌の青空』筑摩書房、1987年

『慈悲心鳥がバサバサと骨の羽を拡げてくる』(吉増剛造筆録)、書肆山田、1992年

『土方巽全集 I・II』河出書房新社、1998年(新装普及版 2005年)

2) 写真集

『おとこと女』細江英公(写真)、カメラアート社、1961年(復刊 ナディッフ、2006年)

『鎌鼬 ― 細江英公写真集』細江英公(写真)、現代思潮社、1969年

『土方巽舞踏写真集 危機に立つ肉体』細江英公ほか(写真)、アスベスト館監修、パルコ出版、1987年

『土方巽舞踏大鑑 かさぶたとキャラメル』種村季弘・鶴岡善久・元藤燐子編、悠思社、1993年

『土方巽の舞踏世界 中谷忠雄写真集』中谷忠雄(写真)、心泉社、2003年

3) 映像記録資料・映画

『ジャズ娘誕生』(撮影:春原政久)1957年

『犠牲』(撮影:ドナルド・リチャー)1959年

『へそと原爆』(撮影:細江英公)1960年

『あんま』(撮影:飯村隆彦)1963年

『紅閨夢』(撮影:武智鉄二)1965年

『バラ色ダンス』(撮影:飯村隆彦)1965年

『肉体の叛乱』(撮影:中村宏)1968年

『残酷・異常・残虐物語 元禄女系図』(撮影:石井輝男)1969年

『明治・大正・昭和 猟奇女犯罪史』(撮影:石井輝男)1969年

『恐怖奇形人間 江戸川乱歩全集』(撮影:石井輝男)1969年

『臍閣下』(撮影:西江孝之)1969年

『日本暗殺秘録』(撮影:中島貞夫)1969年

『日本の悪霊』(撮影:黒木和雄)1970年

『温泉こんにゃく芸者』(撮影:中島貞夫)1970年

『怪談・昇り竜』(撮影:石井輝男)1970年

『誕生』(撮影：秋山智弘) 1970年
『闇の中の魑魅魍魎』(撮影：中平康) 1971年
『痲瘡譚』(撮影：大内田圭弥) 1972年
『夏の嵐』(撮影：荒井美三雄) 1973年
『卑弥呼』(撮影：篠田正浩) 1973年
『陽物神譚』(撮影：鈴木清爾) 1973年
『小日傘』1975年
『ひとがた』1976年
『鯨線上の奥方』1976年
『風の景色』(撮影：大内田圭弥) 1976年
『東北歌舞伎計画Ⅳ』1985年
『一〇〇〇年刻みの日時計 牧野村物語』(撮影：小川紳介) 1987年
『土方巽・夏の嵐』(撮影：荒井美三雄) 2003年

4) ポスター

「6人のアヴァンギャルド(第1回650EXPERIENCEの会)」(デザイン：金森馨) 1959年
「土方巽DANCE EXPERIENCEの会1960」(デザイン：荒木実) 1960年
「第2回6人のアバンギャルド」(デザイン：加納光於) 1960年
「ジャズ映画実験室」(デザイン：金森馨) 1961年
「土方巽DANCE EXPERIENCEの会」(デザイン：加納光於) 1961年
「暗黒舞踏派提携記念公演・バラ色ダンス」(デザイン：横尾忠則) 1965年
「性愛懲罰学指南図絵 — トマト」(デザイン：野中ユリ) 1966年
「高井富子舞踏公演 形而情学」(デザイン：篠原佳尾) 1967年
「舞踏ジュネ」(デザイン：谷川晃一) 1967年
「芦川羊子第一回リサイタル」(デザイン：中村宏) 1968年
「高井富子舞踏公演 まんだら屋敷」(デザイン：清水晃) 1968年
「土方巽と日本人：肉体の叛乱1」(デザイン：横尾忠則) 1968年
「土方巽と日本人：肉体の叛乱2」(デザイン：横尾忠則) 1968年
「土方巽熾儀大踏鑑(付) コレクション展示即売」(デザイン：横尾忠則) 1970年
「骨餓身峠死人葛」(デザイン：栗津潔) 1970年
「四季のための二十七晩」(デザイン：土方巽、写真：吉野章郎) 1972年
「四季のための二十七晩」(デザイン：土方巽、写真：小野塚誠) 1972年
「静かな家 前篇」(デザイン：田中一光、写真：山崎博) 1973年
「静かな家 後篇」(デザイン：田中一光、写真：小野塚誠) 1973年
「風の風景」(デザイン：角田和雄) 1976年
「間展」(デザイン：杉浦康平) 1978年
「病める舞姫1」(デザイン：吉岡実) 1987年
「病める舞姫2」(デザイン：加納光於) 1987年
「病める舞姫3」(デザイン：横尾忠則) 1987年
「病める舞姫4」(デザイン：細江英公) 1987年
「病める舞姫5」(デザイン：中西夏之) 1987年
「病める舞姫6」(デザイン：田中一光) 1987年

「病める舞姫7」(デザイン: 田中一光) 1987年

5) 定期刊行物特集号

- 『美術手帖』「特集 土方巽の“踊る”」1973年2月号
『現代詩手帖』「特集 舞踏: 身体空間としての言語」1977年4月号
『新劇』「特集 舞踏 魂の枢」1977年8月号
『夜想』第9号「特集 暗黒舞踏」ペヨトル工房、1983年7月
『現代詩手帖』「特集 舞踏・身体・言語」1985年5月号
『ダブル・ノーテーション』「特集 極端な豪奢・土方巽リーディング」1985年、第2号
『現代詩手帖』「特集 追悼 土方巽」1986年3月号
『ユリイカ』「特集 追悼・土方巽」1986年3月号
『美術手帖』「特集 美術の土方巽・時間に描く肉体」1986年5月号
『現代詩手帖』「特集 東北『虫開き』講話から土方巽追悼公演へ」1987年11月号
『江古田文学』「特集 土方巽・舞踏」江古田文学会、1990年1月
『芸術新潮』「特集 世紀末に降臨する舞踏の“魔神” 土方巽」1998年3月号
『舞台評論』「特集 土方巽」第1号、東北芸術工科大学東北文化研究センター、2004年5月
『江古田文学』「特集 土方巽・舞踏」1990年冬号
『慶應義塾大学アート・センター ブックレット 6』「ジェネティック・アーカイヴ・エンジン — デジタルの森で踊る土方巽 —」2000年
『Corpus 身体表現批評』第4号「特集 土方巽」2008年3月

6) 展覧会図録

- 『土方巽とその周辺展 — 闇と光のイコノロジー』横浜市民ギャラリー、1998年
『土方巽展 — 原肉体への回帰』広島市現代美術館、1991年
『土方巽展 — 風のメタモルフォーゼ』秋田市立千秋美術館、1991年
『美術と舞踏の土方巽展』池田21世紀美術館、1997年
『土方巽を幻視する』愛知県文化情報センター、1997年
『土方巽と大野一雄の六〇年代』溝端俊夫編、BankArt 1929、2005年
『土方巽の舞踏 — 肉体のシュルレアリスム・身体のアントロジー』川崎市岡本太郎美術館・慶應義塾大学アート・センター編、川崎市岡本太郎美術館発行、2003年
『土方巽+中西夏之 背面』[リーフレット] 慶應義塾大学アート・スペース/慶應義塾大学アート・センター(森下隆、本間友)編、2012年

7) 書誌・資料集

- 『四季のための二十七晩』土方巽アーカイヴ編、1998年
『土方巽 [舞踏] 資料集第1歩』慶應義塾大学アート・センター発行、2000年
『ジェネティック・アーカイヴ・エンジン — デジタルの森で踊る土方巽』[慶應義塾大学アート・センター ブックレット 6] 慶應義塾大学アート・センター編、2000年
『バラ色ダンスのイコノロジー 土方巽を再構築する』(平成12年度科学研究費補助金(COE形成基礎研究費)報告書) 鷲見洋一・前田富士男・森下隆・柳井康弘企画・編集、慶應義塾大学アート・センター発行、2000年
『土方巽の舞踏 — 肉体のシュルレアリスム・身体のアントロジー』川崎市岡本太郎美術館・慶應義塾大学アート・センター編、慶應義塾大学出版会、2003

年

『肉体の叛乱 — 舞踏1968／存在のセミオロジー』前田富士男・渡部葉子・森下隆・本間友編、慶應義塾大学アート・センター発行、2009年

『土方巽 舞踏譜の舞踏 — 記号の創造・方法の発見』森下隆著、慶應義塾大学アート・センター発行、2010年

『幻の万博映画「誕生」 — アストロラマで踊る土方巽』森下隆・本間友編、慶應義塾大学アート・センター発行、2012年

E. 草間彌生 (1929- 画家)

1) カタログ・レゾネ

『草間彌生全版画 1979-2004 Kusama Yayoi All prints of Kusama Yayoi 1979-2004』阿部出版、2005年

『草間彌生全版画 1979-2011 Yayoi Kusama Prints 1979-2011』阿部出版、2011年

『草間彌生全版画 1979-2013 Yayoi Kusama Prints 1979-2013』阿部出版、2013年

2) 詩文集・画集・作品集

『7』世耕政隆・玉置正敏と共著、ジャパン・エディション・アート社、1977年

『草間彌生 Driving Image』パルコ出版、1986年

『YAYOI KUSAMA : PRINT WORKS 草間彌生版画集』阿部出版社、1992年

『草間彌生』岡部版画出版、1992年

『草間彌生 PART 2』岡部版画出版、1993年

Yayoi Kusama, London: Phaidon Press Ltd., 2000.

『YAYOI KUSAMA Furniture by graf: decorative mode no. 3』青幻社、2003年

『草間彌生 永遠の現在 Yayoi Kusama. Eternity-modernity』松本透ほか編、後町幸枝ほか訳、美術出版社、2005年

Yayoi Kusama, ed. Louis Neri and Takaya Goto, Rizzoli International, 2012.

3) 小説・詩集

『マンハッタン自殺未遂常習犯』工作舎、1978年

『マンハッタン自殺未遂常習犯』角川文庫、角川書店、1984年

「クリストファー男娼窟」『野生時代』第11巻第1号、1984年1月、360-376頁

「離人カーテン囚人」『野生時代』第11巻第5号、1984年5月、192-212頁

「死臭アカシア」『野生時代』第11巻第5号、1984年5月、182-190頁

『クリストファー男娼窟』角川書店、1984年（再版1989年）（中国語訳：『克里斬多夫男娼窟』台北・皇冠出版社、1999年）

『聖マルクス教会炎上』パルコ出版、1985年

『天と地の間』而立書房、1988年

『ウッドストック陰莖斬り』ペヨトル工房、1988年

『痛みシャンデリア』ペヨトル工房、1989年

『心中櫻ヶ塚』而立書房、1989年

『かくなる憂い』而立書房、1989年

『ケープ・コッドの天使たち』而立書房、1990年

『セントラルパークのジギタリス』而立書房、1991年

『沼に迷いて』 而立書房、1992年
『ニューヨーク物語』 而立書房、1993年
『蟻の精神病院』 而立書房、1994年
『すみれ強迫』 作品社、1998年
Hustlers Grotto: Three novellas. Wandering Mind Books, Berkeley, California, 1998.
Violet Obsession: Poems. Wandering mind books, Berkeley, California, 1998.
『ニューヨーク'69』 作品社、1999年

4) 自伝

Yayoi Kusama, Autografi: Yayoi Kusama, in: *D'ars*, December 20, 1965– March 10, 1966, vol. 6, no. 5, p. 82.
『無限の網 草間彌生自伝』 作品社、2002年
Infinity net: the autobiography of Yayoi Kusama, trans. Ralph MacCarthy, University of Chicago Press, 2011.
『無限の網 草間彌生自伝』 新潮文庫、新潮社、2012年

5) 随筆

a. 単行書

『わたし大好き I Like myself』 INFASパブリケーションズ、2007年
『Hi, Konnichiwa 草間彌生 Art book』 講談社、2012年
『水玉の履歴書』 集英社新書、集英社、2013年

b. 定期刊行物

「美術への眼を開け〈一画人の懺え〉」『信濃往来』第27号、1952年11月、20-21頁
「び・い・ぶ・る〈個展をおわって〉」『芸術新潮』第6巻第4号、1955年4月、35頁
「新人の主張 イワンの馬鹿」『芸術新潮』第6巻第5号、1955年5月、164-165頁
「わたくしの秋」『信濃毎日新聞』1955年9月15日、2面
「いたいこと 草間彌生さん」『毎タタイムズ』1957年8月7日
「渡米を前にして 私の夢はかくして実現しようとする」『信濃往来』第85号、1957年9月、39-40頁
「シアトル便り」『南信日日新聞』1958年1月30日、4面
「アメリカ便り 私の見たアメリカの印象（上）」『信濃中部毎夕新聞』1958年3月18日
「アメリカ便り 私の見たアメリカの印象（下）」『信濃中部毎夕新聞』1958年3月19日
「シアトルの岸辺 アメリカ画信」『信濃毎日新聞』1958年5月1日、4面
「び・い・ぶ・る〈米国での第一歩〉」『芸術新潮』第9巻第6号、1958年6月、31頁
「海外スケッチ便り アメリカの雲海」『読売新聞』1958年10月7日（夕刊）、3面
「ブリニッチ [ママ]・ビレッジのこと」『高知新聞』1959年4月8日、5面
「アメリカ・個展の旅（上）お蔭様でうけて居ます」『信濃往来』第9巻第5号、1959年5月、36頁
「アメリカ・個展の旅（承前）」『信濃往来』第106号、1959年6月、36-37頁

- 「び・い・ふ・る (国際展に出品)』『芸術新潮』第10巻第6号、1959年6月、31頁
- 「女ひとり国際画壇をゆく」『芸術新潮』第12巻第5号、1961年5月、127-130頁
- 「今週の表紙 赤 作品28」『朝日ジャーナル』第3巻第43号、1961年10月22日、表紙・表紙裏
- 「海外文化通信 画壇にうずまく生存競争」『日本経済新聞』1963年2月3日、16面
- 「ハプニングの女王 “ニッポン滞在日誌”」『新評』第200号、1970年5月、268-269頁
- 「全米から参加者が殺到した私の全裸パーティ」『現代』第4巻第5号、1970年5月、348-354頁
- 「特別手記 なぜ、私はNUDEを公開するか」『勝利』第4巻第5号、1970年5月、128-134頁
- 「一 日本で私は今一」『未踏』第1巻第4号、1975年4月、102-103頁
- 「このごろ、制作もひっそりとそっとしておいて」『毎日新聞』1975年8月22日(夕刊)、5面
- 「わが魂の遍歴と闘い スキャンダル・メーカーの評に抗して、アメリカそして世界を舞台に生きる異端の前衛美術家の真実の声」『芸術生活』第28巻第11号、1975年11月、96-113頁
- 「語るべき言葉もないいま (美術年鑑 1976)」『美術手帖』第403号、1976年1月、28-29頁
- 「生と死への鎮護にささげる」『小原流挿花』第26巻第10号、1976年10月、64-65頁
- 「特集 誰が最も影響を与えたか 120作家のアンケートによる」『美術手帖』第431号、1978年3月、87頁
- 「離人カーテンの囚人 1948」『近代風土』第5号、1978年10月、129-134頁
- 「故郷の雪を見た感激 (上)」『月刊信濃ジャーナル』第30巻第4号、1979年4月、42-43頁
- 「故郷の雪を見た感激 (下)」『月刊信濃ジャーナル』第30巻第5号、1979年5月、66-67頁
- 「降雪の季節」『近代風土』第5号、1979年5月、49-53頁
- 「クサマ夢販売業地球支店」『遊』第1007号、1979年6月、150-151頁
- 「魔術師・瀧口修造の奇蹟」『みすず』第21巻第10号、1979年10月、74-79頁
- 「芸術への憧憬」『信州往来』第6巻第3号、1980年2月、17-18頁
- 「表紙の言葉 赤土と果物」『月刊信濃ジャーナル』第31巻第4号、1980年4月、29頁
- 「アートに熱中する日々」『月刊信濃ジャーナル』第32巻第1号、1981年1月、103頁
- 「北沢先生の肖像画」『屋上』第48号、1981年3月、41-43頁
- 「誤解だらけのふるさと」『月刊信濃ジャーナル』第32巻第2号、1982年2月、43頁
- 「版画邑通信 毎日制作」『版画芸術』第37号、1982年春、112頁
- 「死にゆく口実 1977」『近代風土』第18号、1983年夏、48-52頁
- 「日々は芸術」『月刊信濃ジャーナル』第35巻第1号、1984年1月、18-19頁
- 「近況です」『アトリエ』第684号、1984年2月、106-107頁
- 「母の死・そして水」『楽叢書』第4号、1984年12月、15頁
- 「新春にさいして」『月刊信濃ジャーナル』第36巻第1号、1985年1月、19頁
- 「陳腐で、風俗で、醜くて、駄目な日常生活から自分を救うのは、己を信じる過激なアート心だ」『プレイボーイ』第11巻第2号、1985年2月、29頁

- 「脱構築ロマン 子捨て草原」『勉強堂 スタジオ・ボイス別冊』、1985年7月、88-97頁
- 「セルフ・オブリラクション」『is』第29号、1985年9月、41-42頁
- 「ニューヨークが好きだ」『GS』第6号、1986年11月、8-9頁
- 「芸術はわが魂の信仰」『美術家』第25号、1989年1月、91-97頁
- 「SiGHT SEEing aRT」（中島理恵と共著）『ビデオコレクション』第7巻第2号、1989年2月、36-39頁
- 「超東京百景 大光画 最終回〈ロッポンギ月華クラブ〉」（撮影：荒木経惟）『S&M スナイパー』第11巻第4号、1989年4月、37-46頁
- 「コーヒー杯の毎日」『JEWEL』第18巻第9号、1990年9月、16-17頁
- 「彫刻家としてのデュビュッフエ」『美術の窓』第10巻第7号、1991年7月、36-37頁
- 「マン・レイは“沼”である ジレットントをエスタブリッシュした男」『21世紀版画』第2巻第7号、1991年7月、86頁
- 「草間彌生の交遊録 ジョゼフ・コーネル（Ⅰ）」『美術の窓』第10巻第10号、1991年10月、78-82頁
- 「草間彌生の交遊録 ジョゼフ・コーネル（Ⅱ）」『美術の窓』第10巻第11号、1991年11月、82-87頁
- 「草間彌生の交遊録 ジョージア・オキーフ」『美術の窓』第10巻第12号、1991年12月、94-97頁
- 「草間彌生の交遊録 ドナルド・ジャッド」『美術の窓』第11巻第1号、1992年1月、84-87頁
- 「草間彌生の交遊録 ウォーホル、スミス、リード卿」『美術の窓』第11巻第2号、1992年2月、76-79頁
- 「ジョン・ケージはアヴァンギャルド運動の始祖の一人」『21世紀版画』第3巻第11号、1992年11月、57頁
- 「リリカルな拘束 ジョゼフ・コーネルとわたしの十年」『美術手帖』第664号、1993年1月、214-222頁
- 「クサマがクサマであるために」[特集 草間彌生 — オブセッションル・アートの出自と展開]『美術手帖』第671号、1993年6月、16-19頁
- 「GAY SCENES [ママ] in N. Y. before “STONE WALL RIOT”」『別冊宝島EX』1994年2月、172-176頁
- 「表紙のことば 信濃路と東京」『信州の東京』第976号、1994年9月、13-15頁
- 「幻覚よ、こんにちは」『芸術新潮』第46巻第1号、1995年1月、90-92頁
- 「私は神である」『芸術新潮』第47巻第3号、1996年3月、65-66頁
- 「同じ動作の繰り返しが私の芸術」『草月』第226号、1996年6月、105頁
- 「花」『たのしい園芸』第90号、1996年7月、3頁
- 「私の夢の美術館 魂を昂揚させるような…」『産経新聞』1996年12月1日、12面
- 「カボチャの中の私」『版画芸術』第103号、1999年3月、80-81頁
- 「週刊新潮掲示板 草間彌生」『週刊新潮』第44巻第17号、1999年4月29日、86頁
- 「私はなぜバルーンを使うのか」『草月』第244号、1999年6月、49頁
- 「草間彌生／三篇」『ウェイストランド』第3号、1999年夏（7月26日）、194-199頁
- 「漢字さんの美術館 草間彌生」『インボイス』第2号、1999年9月、2頁
- 「強迫神経症に捧げる詩」『ウェイストランド』第7号、2000年春（9月6日）、44頁
- Yayoi Kusama & Damien Hirst, Dotted History, in: *The Observer Magazine*, January 16, 2000.

- 「心の病と芸術の狭間で」[特集 人生で「救い」を得た時]『新潮45』第20巻第5号、2001年5月、67-71頁
- 「フォト・アートの誕生 マン・レイ写真展3 ガラスの涙」『東京新聞』2002年5月15日(夕刊)、10面
- 「『家』の履歴書(374) 草間彌生 画家・彫刻家 — この二十数年は精神科に寝泊りし朝から夕まで創作に専念する日々」『週刊文春』第44巻第20号、2002年5月23日、148-151頁
- 「サイソマティック芸術への道のり セックス嫌悪の克服を、作品のモチーフにして」[特集 本当のセックスを知りたい]『婦人公論』第87巻第21号、2002年11月7日、34-37頁
- 「わたしが一番! わたし大好き! 筆とキャンバスさえあれば死の間際まで描き続ける」『婦人公論』第93巻第5号、2008年2月22日、148-150頁
- 「芸術家草間彌生ドキュメント」[特集: 草間彌生]『美術手帖』第64巻第965号、2012年4月、38-87頁

6) 対談・鼎談・インタビュー

- 「座談会連載38回 日出造・幸雄の『なるほどねえ』マンパクをやりに来ました!」(鼎談者: 近藤日出造、杉浦幸雄)『週刊漫画サンデー』第12巻第19号、1970年5月20日、88-93頁
- 「なんで、あんた裸になるんや」(対談者: 遠藤周作)『婦人倶楽部』第51巻第5号、1970年5月、227-231頁
- 「ポップ・アートの女王草間彌生さんと語る」(鼎談者: 遠藤燦果、藤岡筑郎)『月刊信濃ジャーナル』第29巻第10号、1978年10月、46-51頁
- 「『草間女史を囲んで』芸術鼎談(上)」(鼎談者: 藤本徳次、伊部政隆)『信州往来』第4巻第10号、1978年10月、18-24頁
- 「『草間女史を囲んで』芸術鼎談(下)」(鼎談者: 藤本徳次、伊部政隆)『信州往来』第4巻第11号、1978年11月、25-29頁
- 「ヨシダ・ヨシエの連載対談 エロティシズムと創造Ⅲ」(対談者: ヨシダ・ヨシエ)『art vision』第12巻第6号、1982年6月、4-7頁
- 「ILLUMINANT SCENE 1 作家のアトリエから」(対談者: 植田実)『PRINT COMMUNICATION』第91号、1983年4月、2-4頁
- 「ILLUMINANT SCENE 2 作家のアトリエから その2」(対談者: 植田実)『PRINT COMMUNICATION』第92号、1983年5月、2-3頁
- 「ILLUMINANT SCENE 3 作家のアトリエから その3」(対談者: 植田実)『PRINT COMMUNICATION』第93号、1983年6月、16-17頁
- 「対談 病理をアートする」(対談者: 西村陽平)『21世紀版画』第2巻第2号、1991年2月、36-40頁
- 「対談 ヴィジョンの降臨」(対談者: 横尾忠則)『季刊みづゑ』第958号、1991年春、31-45頁
- 「特別座談会 日本の古い体質を打破しなければコンテンポラリー・アートは輝かない」(対談者: 加藤芳信)『月刊ギャラリー』第82号、1992年2月、61-67頁
- 「インタビュー 無限の容貌」[巻頭特集 永劫回帰の生と芸術 — 草間彌生〔含 略歴〕]『版画芸術』第103号、1999年3月、96-99頁
- 「特別企画 草間彌生×荒木経惟サクラ対談」(対談者: 荒木経惟)『美術手帖』第771号、1999年6月、124-135頁
- 「インタビュー『網点の幻覚が体中に広がっていくの』草間彌生は今日も無限増殖中」『芸術新潮』第50巻第7号、1999年7月、80-85頁
- Bomb, talk with Grady Turner, in: *Winter* 1999, no. 66, pp. 62-69.
- 「インタビュー 草間彌生 — 前衛から救済へ — 60年代と今をつなぐ《ナルシスの庭》(特集 横浜トリエンナーレ2001の歩き方) — (60s NOW! — art・beyond — ヨコハマカラ60年代ガ見エル) (インタビューア: 松井みどり)『美

- 術手帖』第53巻第811号、2001年10月、90-93頁
- 「前衛への挑戦」[特集 現代アートの潮流 横浜トリエンナーレ] (対談者：南條史生)『国際交流』第23巻第3号、2001年、75-81頁
- 「みずたましましま対談 草間彌生 梅図かずお」(対談者：梅図かずお)『プリント21』第12巻第4号、2001年冬(11月1日)、14-20頁
- 「ひと・凹凸記(12) 前衛芸術家 草間彌生 — 心の病と芸術を両立させた芸術家。網目の幻覚が創作の根源」(対談者：本橋信宏)『日経マネー』第220号、2002年5月、88-90頁
- 「草間彌生インタビュー — 彼女はいかにして時代を駆け抜けたか」(インタビュアー：谷川渥)『美術手帖』第54巻第825号、2002年9月、134-140頁
- 「草間彌生ロングインタビュー オブセッショナル・ビルディング・ロマンス」(インタビュアー：斎藤環) [巻頭特集 草間彌生]『美術手帖』第56巻第846号、2004年3月、25-37頁
- 「YAYOI KUSAMA ファンタジーの部屋へようこそ」(対談者：花代)『流行通信』第490号、2004年4月、102-107頁
- 「皆川明の時のかさなり vol. 17」(対談者：皆川明)『装苑』第59巻第5号、2004年5月、26-27頁
- 「染五郎さん、草間彌生さんに夢中ってホントですか?」『GQ JAPAN』第2巻第5号、2004年5月、162-165頁
- 「インタビュー 草間彌生 — スキャンダルの女王から世界のKUSAMAへ」(インタビュアー：建畠哲) [特集 日本近現代美術史 1905-2005]『美術手帖』第57巻第866号、2005年7月、32-41頁
- 「アートの地殻変動 (Vol. 23) 草間彌生」(インタビュアー：北川フラム)『美術手帖』第63巻第949号、2011年3月、170-174頁
- 「草間彌生インタビュー」(インタビュアー：建畠哲) [特集：草間彌生]『美術手帖』第64巻第965号、2012年4月、32-37頁

7) そのほか

- Lewis Carroll's Alice's adventures in Wonderland, with artwork by Yayoi Kusama, Penguin, 2012.
- 「草間彌生と奈良美智の往復書簡」[特集：奈良美智 原点回帰]『美術手帖』第64巻973号、2012年9月、52-55頁

F. ゲルハルト・リヒター (1932- 画家)

1) カタログ・レゾネ

- Gerhard Richter. Atlas der Fotos, Collagen und Skizzen [1962-1996]*, hrsg. Helmut Friedel u. Ulrich Wilmes, Köln: Oktagon, 1997. (Englische Edition: London, 1997).
- Derhard Richter. Zeichnungen 1964-1999, Werkverzeichnis*, mit einem Aufsatz von Birgit Pelzer, hrsg. Dieter Schwarz, Winterthur: Kunstmuseum/ Düsseldorf: Richter Verlag, 1999. (Englische Edition: Düsseldorf, 1999).
- Gerhard Richter. Atlas [1962-2006]*, hrsg. Helmut Friedel, Köln: König, 2006. (Englische Edition: London, 2006).
- Gerhard Richter: Bilder 1962-1985 = Paintings 1962-1985*, mit einem von Dietmar Elger bearb. *Catalogue Raisonné*, hrsg. Jürgen Harten, Köln: DuMont, 1986.
- Gerhard Richter. Vol. 1 : Katalog der Ausstellung = Exhibition catalogue*, Stuttgart: Cantz, 1993.
- Gerhard Richter. Vol. 2 : Texte*, von Benjamin H. D. Buchloh, Peter Gidal, Birgit Pelzer, Stuttgart: Cantz, 1993.

Gerhard Richter. Vol. 3 : Werkübersicht= Catalogue raisonné 1962-1993, Stuttgart: Cantz, 1993.

Gerhard Richter, with essays by Martin Hentschel and Helmut Friedel and a catalogue raisonné of paintings from 1993-1998, London: Anthony d'Offay Gallery, 1998.

Gerhard Richter. Mit einem Essay von Armin Zweite und dem Werkverzeichnis 1993-2004, Düsseldorf: K20K21 Kunstsammlung Nordrhein- Westfalen/ Düsseldorf: Richter Verlag, 2005. (Englische Edition: Düsseldorf: K20K21 Kunstsammlung Nordrhein- Westfalen/ Düsseldorf: Richter Verlag, 2005).

Gerhard Richter: Editionen 1965-1993, hrsg. Hubertus Butin, München: Verlag F. Jahn 1993.

Gerhard Richter: Editionen 1965-2004, catalogue raisonné, hrsg. Hubertus Butin u. Stefan Gronert, Ostfildern: Hatje Cantz, 2004. (Englische Edition: Ostfildern : Hatje Cantz, 2004).

Gerhard Richter: Catalogue Raisonné, Vol. 1-, hrsg. Dietmar Elger, Gerhard Richter Archiv u. d. Staatlichen Kunstsammlung Dresden., Ostfildern: Hatje CantzS, 2011-.

2) 著作集

Gerhard Richter. Text, hrsg. Hans Ulrich Obrist, Frankfurt am Main/ Leipzig, 1993.

英語版 *The Daily Practice of Painting*, London, 1995.

仏語版 *Textes*, Dijon, 1995.

伊語増補版 *La pratica quotidiana della pittura*, Milan, 2003.

日本語版『ゲルハルト・リヒター 写真論／絵画論』清水穰訳、淡交社、1996年

Gerhard Richter. Text, hrsg. Dietmar Elger u. Hans Ulrich Obrist, Köln, 2008.

英語版 *Writings, 1961-2007*, New York, 2009. / *Text*, London, 2009.

3) 展覧会図録

『第5回長岡現代美術館賞展』長岡現代美術館、1968年

『現代世界美術展 東と西の対話』東京国立近代美術館、1969年

『現代ドイツ美術展』東京国立近代美術館、1971年

『第2回富山国際現代美術展』富山県立近代美術館、1984年

『絵画 1977-1987』国立国際美術館、1987年

『ゲルハルト・リヒター』ザ・コンテンポラリー・アートギャラリー、1988年

『ゲルハルト・リヒター』西武百貨店、1988年

『ドイツ70年代グラフィック展』目黒区美術館、1988年

『芸術風』宮城県美術館ほか、1988年

『ドローイングの現在』国立国際美術館、1989年

『アダムとイヴ』埼玉県立美術館、1992年

『大光コレクション展』新潟県立近代美術館、1993年

『冬のメルヘン 20世紀美術の神話』栃木県立美術館、1993年

『現代美術への視点 絵画、唯一なるもの』東京国立近代美術館・京都国立近代美術館、1995年

『現代ドイツ美術 ボイス以降の若き作家たち』国立国際美術館、1995年

- 『ゲアハルト・リヒター展 Editionen 1967-1991』 フジテレビギャラリー、1996年
『GERHARD RICHTER』 WAKO WORKS OF ART、1996年
『レボリューション／美術の60年代 ウォーホルからボイスまで』 東京都現代美術館、1996年
『ゲルハルト・リヒター』 WAKO WORKS OF ART、1997年
『ボンピドゥー・コレクション展』 東京都現代美術館、1997年
『光の方へ…』 京都市美術館、1997年
『なぜ、これがアートなの?』 水戸芸術館現代美術センター、1999年
『顔 絵画を突き動かすもの』 東京国立近代美術館、2000年
『ゲルハルト・リヒター：Gerhard Richter：Atlas』 沼辺信一・林寿美・松岡剛編、川村記念美術館ほか、2001年
『GERHARD RICHTER』 WAKO WORKS OF ART、2002年
『ゲルハルト・リヒター：鏡の絵画：記録集：開館一周年記念』 北出智恵子執筆・編集、金沢1世紀美術館、2005年

※海外展図録に関しては次の書誌を参照のこと：

Bibliography, in: *Gerhard Richter: Catalogue Raisonné*, Vol. 1, hrsg. Dietmar Elger, Gerhard Richter Archiv u. d. Staatlichen Kunstsammlung Dresden., Ostfildern: Hatje Cantz, 2011, S. 451-508.

G. 荒川修作（1936-2010 美術家）

1) 著述

a. 単行書

Mechanismus der Bedeutung (The Mechanism of Meaning), trans. Calro Huber, München: Bruckmann, 1971.

For Example (A Critique of Never), trans. Aldo Tagliaferri, Milan: Alessandra Castelli, 1974. (邦訳：『例えば（ネヴァー）の批判』：ひとつのメロドラマ マドリン・ギンズと荒川修作による』 [マドリン・ギンズと共著] 暮沢剛巳訳、[出版社・出版年不詳])

『意味のメカニズム（別冊）』（マドリン・ギンズと共著）市川浩訳・監修、リプロポート、1988年

Pour ne pas mourir - To Not to Die, trans. François Rosso, Paris: Editions de la Difference, 1987. (邦訳：『死なないために』 [マドリン・ギンズと共著] 三浦雅士訳、西武美術館編、リプロポート、1988年)

The Mechanism of Meaning, 3rd ed. New York: Abbeville, 1988. (邦訳：『意味のメカニズム（1）』 [マドリン・ギンズと共著] 市川浩訳・監修、リプロポート、1988年)

Architecture: Sites of Reversible Destiny (Architectural Experiments after Auschwitz-Hiroshima), London: Academy Editions, 1994. (邦訳：『建築 宿命反転の場：アウシュヴィッツ — 広島以降の建築的実験』 [マドリン・ギンズと共著] 工藤純一・塚本明子訳、水声社、1995年)

『養老天命反転地 荒川修作+マドリン・ギンズ 建築的実験』毎日新聞社、1995年

『生命の建築 荒川修作・藤井博巳対談集』水声社、1999年

Architectural Body, U, Alabama Press, 2002. (邦訳：『建築する身体 人間を超えてゆくために』 [マドリン・ギンズと共著]、河本英夫訳、春秋社、2004年)

Making Dying Illegal (Architecture Against Death: Original to the 21st Century), New York: Roof Books, 2006. (邦訳：『死ぬのは法律違反です 死に抗する建築

21世紀への源流」〔マドリン・ギンズと共著〕河本英夫・稲垣論訳、春秋社、2007年)

『三鷹天命反転住宅 ヘレン・ケラーのために：荒川修作+マドリン・ギンズの死に抗する建築』水声社、2008年

『ヘレン・ケラーまたは荒川修作』（マドリン・ギンズと共著）、渡部桃子監訳、新書館、2010年

b. 定期刊行物

「私の発言 現代美術の実験展出品作家の主張 私と時空」『国立近代美術館ニュース 現代の眼』第77号、1961年4月、4頁

「To Miyakawa」『エピステーメー』1978年11月号

「意味のメカニズム」〔特集：荒川修作〕（マドリン・ギンズと共著）『みづゑ』第892号、1979年8月、36-53頁

「Call of Continuity to Shuzo Takiguchi」『現代詩手帖』1979年10月

「ひと言」（渋沢孝輔訳）『草月』第166号、1985年、40頁

「制作ノート」（本江邦夫訳）『第6回 オマージュ瀧口修造 荒川修作展』図録、佐谷画廊、1985年

「講演〈構築〉するために エコノミーとモラルティーを支えるもの」『季刊思潮』第1号、1988年、116-134頁

「エピナール・プロジェクト 制作ノート」（マドリン・ギンズと共著）『荒川修作—宮川淳へ』展図録、東高現代美術館、1990年

「アヴァンギャルドの向こう側」（対談者：植島啓司）『流行通信』第16号、1991年3月、111-115頁

「荒川修作 20世紀末大革命 知覚認識の新たな地平を求めて」（美術手帖編集部と共著）『美術手帖』第693号、1994年9月、196-203頁

「〈養老天命反転地〉出来事から“延長”を見つけるために」『新建築』1995年11月号

「思想家 太郎かあさん」〔大特集：さよなら、岡本太郎〕『芸術新潮』第47巻第5号、1996年5月、80-82頁

「反転可能な運命への局地的なアプローチが定まったとたんにゲームははじまり、かつ終わっている、あるいは非ゲームになるかわることについて」（マドリン・ギンズと共著、塚本明子訳）〔特集：荒川修作+マドリン・ギンズ〕『現代思想』第24巻第10号、1996年8月、247-250頁

「Einstein or ARAKAWA」（共著）〔特集：荒川修作+マドリン・ギンズ〕『現代思想』第24巻第10号、1996年8月、394-410頁

「〈身体〉の可能性を掘り起こす建築が人間に生きる喜びや希望を与える」『日経アーキテクチュア』2003年2月3日号

「荒川修作からの手紙 偏在している ITALO CALVINO さんへ」『エクスマレッジ・ホーム』2003年10月号

「荒川修作からの手紙 在空場白量さんへ」『エクスマレッジ・ホーム』2003年11月号

「新しい産業としての〈手続きを通じた建築〉 不確かな建築」『水声通信』第2巻第5号、2006年5月、2-4頁

2) 対談・鼎談・座談会・インタビュー

「若い冒険派は語る」（座談会出席者：赤瀬川源平、伊藤隆康、工藤哲巳、中西夏之；司会：江原順、解説：中原佑介）『美術手帖』第192号、1961年8月号

「徹底討議 虚無の闇の中で苦闘したマラルメのあとで」（鼎談者：菅野昭正、渋沢孝輔）『ユリイカ』〔特集：ステファヌ・マラルメ〕第18巻第10号、1986年9月臨時増刊号、228-259頁

「モラルティー、エコノミー、そして戦争」（対談者：市川浩）『季刊思潮』第1

- 号、1988年、135-141頁
- 「未知のシンタクスを求めて 荒川修作の軌跡」(鼎談者：市川浩、三浦雅士)『ヘルメス』第15号、1988年、78-108頁
- 「〈これを見たら神になれるぞ〉 普遍の世界を問い続ける、荒川修作にインタビュー」『ピア』1990年2月15日、266-267頁
- 「〈荒川修作〉入門」(対談者：岡田隆彦)『芸術新潮』第41巻第3号、1990年3月、68-72頁
- 「方法としての空虚と無一 道徳・信仰・思想・芸術 (未発表遺稿対談)」(対談者：野間宏) [特集：野間宏のまなざしのむこうへ]『新日本文学』第46巻第10号、1991年10月、6-15頁
- 「複数の地平に向かって」(対談者：藤井博巳)『新建築』第69巻第6号、1994年6月、238-243頁
- 「知覚の場は何処にあるか」(鼎談者：下条信輔、小林康夫) [特集：アフォーダンス 反デカルトの地平]『現代思想』第22巻第13号、1994年11月、64-85頁
- 「建築とは何か？」 [特集：荒川修作+マドリン・ギンズ] (対談者：丸山洋志)『現代思想』第24巻第10号、1996年8月、8-16頁
- 「対談 都市と身体」 [特別企画：荒川修作+M. ギンズ] (対談者：藤井博巳)『現代思想』第24巻第9号、1996年8月、254-270頁
- 「身体が語る、身体を語る 生態学的啓蒙とは何か？」 [特集：荒川修作+マドリン・ギンズ] (鼎談者：佐々木正人、福原哲郎)『現代思想』第24巻第10号、1996年8月、311-326頁
- 「対談〈建築的身体〉〈建築的人間〉の出現」(対談者：藤井博巳)『建築文化』第52巻第606号、1997年4月、124-132頁
- 「対談 生命の建築にむかって」(対談者：藤井博巳)『本』第23巻第4号、1998年4月、38-43頁
- 「建築する身体を語る」(インタビュアー：塚原史)『図書新聞』第2708号、2005年1月
- 「対談 身体の(再)誕生、〈建築〉の現場から」(対談者：小林康夫) [特集：神経系都市論 身体・都市・クライシス]『10+1』第40号、2005年9月、169-183頁
- 「インタビュー 死なないために」(インタビュアー：丸山洋志) [特集：荒川修作の《死に抗う建築》]『水声通信』第1号、2005年11月、24-38頁
- 「巻頭シンポジウム 身体未来について 〈芸術家、科学者、哲学者のポイエーシス〉(前編)」(鼎談者：河本英夫、宇野邦一)『状況 第三期』第7巻第1号、2006年1月、14-35頁
- 「シンポジウム 身体未来について 〈芸術家、科学者、哲学者のポイエーシス〉(後編)」(鼎談者：河本英夫、宇野邦一)『状況 第三期』第7巻第2号、2006年3月、6-28頁
- 「物質文明より“生命文明”」(インタビュー)『読売新聞』2006年4月18日(夕刊)
- 「荒川修作の意味のメカニズムを解説する(2) 荒川修作インタビュー『建築で人間の意識を生み出す』」(インタビュアー：得丸公明)『電子情報通信学会技術研究報告』第111巻第87号、2011年6月、7-14頁

3) 定期刊行物特集号

- 『みづゑ』 [特集 荒川修作] 1979年7月号
- 『アール・ヴィヴァン』 [特集 荒川修作] 1980年1月号
- 『版画芸術』 [特集 SHUSAKU ARAKAWA] 1984年冬号
- 『美術手帖』 [特別企画 荒川修作「見る者がつくられる場」展] 1992年2月号
- 『現代思想』 [特集 荒川修作+マドリン・ギンズ] 1996年臨時増刊号
- 『水声通信』 [特集 荒川修作の《死に抗う建築》] 2005年11月

『一個人』「特集 想像力の旅がはじまる 荒川修作の建築世界」2006年5月号
“Arakawa”, Derriere le miroir, Galerie Maeght, 1982.

4) 展覧会図録

『現代美術の実験展』国立近代美術館（現東京国立近代美術館）、1961年
『荒川修作展 絵画についての言葉とイメージ』西武美術館、1979年
『荒川修作の世界 意味のメカニズム』国立国際美術館、1979年
『荒川修作全版画展』北九州市立美術館、1979年
『第6回オマージュ 瀧口修造 荒川修作展』佐谷画廊、1986年
『ARAKAWA: Early Works 1961-62 at New York』佐谷画廊、1988年
『荒川修作展 — 宮川淳へ』東高現代美術館、1990年
『荒川修作 無題の形式』佐谷画廊、1991年
『荒川修作の実験展 見る者がつくられる場』東京国立博物館、1991年
『新しい日本の風景を建設し、常識を変え、日常の生活空間を創りだすために
— 荒川修作+マドリン・ギンズ展』NTT出版、1998年
『荒川修作 マドリン・ギンズ展 — 死なないために：養老天命反転地』岐阜県美
術館、2004年
『「偏在の場・奈義の龍安寺・建築する身体」展 — 荒川修作+マドリン・ギン
ズ「太陽」の部屋による』奈義町現代美術館、2004年
『荒川修作を解説する』名古屋市美術館、2005年
『養老天命反転地』財団法人花の都ぎふ花と緑の推進センター、2005年
『荒川修作 60年代立体作品展：1961年夢土画廊古典出品作』ギャラリー・アー
トアンリミテッド、2008年
『死なないための埋葬 — 荒川修作初期作品展』平芳幸造編、国立国際美術館発
行、2010年
Reversible Destiny, New York: Guggenheim Museum/ Abrams Inc., 1997.

H. 吉増剛造 (1939- 詩人)

1) 詩集・選詩集

『出発』新芸術社、1964年
『黄金詩篇』思潮社、1970年
『頭脳の塔』青地社、1971年
『王國』河出書房新社、1973年
『わが悪魔祓い』青土社、1974年
『わたしは燃えたつ蟹気楼』小沢書店、1976年
『草書で書かれた、川』思潮社、1977年
『青空』河出書房新社、1979年
『熱風 a thousand steps』中央公論社、1979年
『大病院脇に聳えたつ一本の巨樹への手紙』中央公論社、1983年
『オシリス、石ノ神』思潮社、1984年
『螺旋歌』河出書房新社、1990年
『八月の夕暮、一角獣よ』沖積舎、1992年
『花火の家の入口で』青土社、1995年

『「雪の島」あるいは「エミリーの幽霊」』集英社、1998年
『The Other Voice』思潮社、2002年
『長篇詩 ごろごろ』毎日新聞社、2004年
『天上ノ蛇、紫のハナ』集英社、2005年
『何処にもない木』試論社、2006年
『表紙 omote-gami』思潮社、2008年
『裸のメモ』書肆山田、2011年

『堀川正美・入沢康夫・富岡多恵子・岡田隆彦・吉増剛造』天沢退二郎編・解説、1967年
『吉増剛造詩集』〔現代詩文庫〕思潮社、1971年
『吉増剛造詩集 1-5』河出書房新社、1977-1978年
『新選吉増剛造詩集』思潮社、1978年
『続・吉増剛造詩集』〔現代詩文庫〕思潮社、1994年
『続続・吉増剛造詩集』〔現代詩文庫〕思潮社、1994年
『吉増剛造詩集』角川春樹事務所、1999年

2) そのほかの著述

a. 単著

『朝の手紙』小沢書店、1973年
『太陽の川』小沢書店、1978年
『螺旋形を想像せよ』小沢書店、1981年
『静かな場所』小沢書店、1981年
『そらをとんだちんちんでんしゃ』（堀口晃写真）小学館、1982年
『緑の都市、かがやく銀』小沢書店、1986年
『打ち震えていく時間』思潮社、1987年
『透谷ノート』小沢書店、1987年
『スコットランド紀行』書肆山田、1989年
『ことばのふるさと』矢立出版、1992年
『死の舟』書肆山田、1999年
『生涯は夢の中径 — 折口信夫と歩行』思潮社、1999年
『ことばの古里、するさと福生』矢立出版、2000年
『燃えあがる映画小屋』青土社、2001年
『剥きだしの野の花 — 詩から世界へ』岩波書店、2001年
『ブラジル日記』書肆山田、2002年
『詩をポケットに — 愛する詩人たちへの旅』NHK出版、2003年
『キセキ — gozo cine』オシリス、2009年
『盲いた黄金の庭』〔写真集〕岩波書店、2010年
『木浦通信』矢立出版、2010年
『詩学講義 無限のエコー』慶應義塾大学出版会、2012年

b. 共著

『空のコラージュ』酣燈社、1978年
『空景／近景 分冊1』（荒木経惟著）新潮社、1991年

- 『空景／近景 分冊2』（荒木経惟著）新潮社、1991年
 『山本正道デッサン集 1968-1992』新潮社、1992年
 『木の骨』（城戸朱理と共著）矢立出版、1993年
 『はるみずのうみ — たんぼほとたんぶぶ』矢立出版、1999年
 『飯田善國・絵画』『飯田義國・絵画』編集室編、銀の鈴社、1999年
 『ドルチェ — 優しく 映像と言語、新たな出会い』（アレクサンドル・ソクーロフ、島尾ミホと共著）児島宏子訳、岩波書店、2001年
 『機 — とともに震える言葉』（関口涼子と共著）書肆山田、2006年
 『映画と写真は都市をどう描いたか』高橋世織編著、ウェッジ、2007年

c. 対談集

- 『安東次男 画家との対話』朝日出版社、1972年
 『盤上の海、詩の宇宙』（対談者：羽生善治）河出書房新社、1997年
 『この時代の縁で』（対談者：市村弘正）平凡社、1998年
 『「アジア」の渚で 日韓詩人の対話』（対談者：高銀）藤原書店、2005年
 『アーキペラゴ — 群島としての世界へ』（対談者および往復書簡文通者：今福龍太）岩波書店、2006年

d. 定期刊行物

- 「加納光於＋大岡信によるリーヴル・オブジェ」『季刊 みづゑ』第849号、1975年12月
 「往復書簡 村上善男・吉増剛造」『季刊アート』1980年秋号、1980年9月
 「鳥たちもみたことのない巣のように、あるいは樹々も考えたことのない根のうに — 若林奮を訪ねて」『現代の眼』『特集 若林奮展』第395号、1987年10月
 「対談 我らの獲物は一滴の光」（対談者：高梨豊）『Photographers' gallery press』第2号、2003年4月
 「『歌』の道をたどりなおす」『月刊 アート・ヴィジョン』第31巻第1号、2003年8月
 『In between 11 吉増剛造 アイルランド』EU・ジャパンフェスト日本委員会、2005年
 『In between 14 13人の写真家25カ国』EU・ジャパンフェスト日本委員会、2005年
 「尽きることのない言葉たち — I. W. 氏に」『たいせつな風景』第16・17合併号、神奈川県立近代美術館、2011年11月
 『凶区 芸術批評誌』第1号、2012年9月 志賀理江子／吉増剛造

3) 展覧会図録

- 『第1回リキテックス・ビエンナーレ受賞作品集』（米倉守、日比野克彦ほかとの共著）パニーコーポレーション、1986年
 「水裏の一葉の後影を見詰めて、幾月か」『東野芳明 photographs 1987 (Catalogue no. 10)』M. Gallery、1987年
 「Touching Bikky」『岡部昌生展 ビッキに触れて』Temporary Space、1991年
 『メカス1991年夏：ニューヨーク、リトアニア、帯広、山形、新宿』（ヨナス・メカス、村田郁夫、鈴木志郎康との共著）メカス日本日記の会、1991年
 「絵馬-天上へのあこがれ」『Ema 12分の1 (Contemporary art in Nunose Shrine)』布忍神社、1991年
 「宇佐美さんにおける、…そしてワッツ (Watts) は」(対談者：広瀬 大志)『宇

- 佐美圭司回顧展 世界の構成を語り直そう』セゾン現代美術館、1992年
- 『水邊の言語オブジェ — 吉増剛造 詩とオブジェと写真』斎藤記念川口現代美術館編、斎藤記念川口現代美術館、1998年
- 『水辺の庭』『柳沢紀子展 水辺の庭』城西大学城西国際大学水田美術館、2002年
- 『西脇順三郎へのオマージュ』『没後20年西脇順三郎展』世田谷文学館、2002年
- 『対談 若林奮×吉増剛造』『融点・詩と彫刻による 河口龍夫×篠原資明 村岡三郎×建畠哲 若林奮×吉増剛造』うらわ美術館編、うらわ美術館、2002年
- 『対談 我らの獲物は一滴の光』（対談者：高梨豊）『我らの獲物は — 滴の光』photographer's gallery、2003年
- 『絵の宇宙の若さについて — 下保昭、井上有一』『井上有一と下保昭の山山の山松本市美術館、2004年
- 『吉増剛造展 書物のヴィジョン 生涯は夢の中径』徳島県立文学書道館編、徳島県文化振興財団／徳島県立文学書道館発行、2004年
- 『神秘の樹と明日の鳥たち — 詩・旅・思索』（シンポジウム）東北芸術工科大学美術館大学構想室、2006年
- 『『朔太郎のデザイン』にむけて』『萩原朔太郎とデザイン — 非日常への回路』水と緑と詩のまち前橋文学館、2007年
- 『吉増剛造 詩の黄金の庭 — 北への挨拶』北海道文学館、2008年
- 『柳沢紀子 夢の地面』（林浩平・森山明子と共著）武蔵野美術大学美術館・図書館、2010年
- 『足利風景 旅の視線、地の視線』足利市立美術館、2010年
- 『飢餓の木2010：ICANOF media art show 2010「飢餓の國・飢餓村・字飢餓の木」』豊島重之編、2010年
- 『対談 現代詩の巨人・旗手 会津・漆を語る』（対談者：和合亮一）『漆のチカラ 漆文化の歴史と漆表現の現在 関連行事報告書』福島県立博物館（小林めぐみ、川延安直）編、2011年
- 『黄泉の小径路 — 東松照明ノート』『東松照明と沖縄 太陽へのラブレター』仲里効ほか編、沖縄県立博物館・美術館、2011年
- 『太古のおもいで（ノスタルジア）猫町』『萩原朔太郎展』世田谷文学館、2011年

1. 川久保玲（1942- デザイナー）

1) 著述

- 『交感スルデザイン』（安藤忠雄ほかと共著）六耀社、1985年
Rei Kawakubo: designer monographs, curated by Terry Jones, Taschen, 2012.

2) 対談・インタビュー

- 『川久保玲 インタビュー』（インタビュアー：テリー・ジョーンズ、石川れい子 翻訳）『i-D JAPAN』1992年4月号
- 『下村満子の大好好奇心 70 川久保玲 デザイナー』（インタビュアー：下村満子）『Asahi journal』第34巻第15号、1992年4月10日、48-53頁
- 『〈話題の人〉 服が体になり、身体が服になる』（インタビュアー：尾原蓉子）『三田評論』第1037号、2001年7月、68-75頁
- 『INTERVIEW 川久保玲 自由と反骨精神が、私のエネルギー源なのです。』（インタビュアー：生駒芳子）『美術手帖』第61巻第931号、2009年12月、104-112頁
- 『川久保玲さんロングインタビュー ファッションで前に進む』『朝日新聞デジ

タル Fashion & Style] 2012年1月19日 (<http://www.asahi.com/fashion/beauty/TKY201201180360.html>)

「コム デ ギャルソン 川久保玲 ロングインタビュー」(インタビュアー：渡辺美津子) 『VOGUE JAPAN』2012年10月号、2012年8月28日

3) 展覧会図録

『Exhibition 4. 1-4. 17, 1992, Comme de Garçons : [VI] A』 Vincent Baurin et al., 1992年

『Essence of quality』 京都服飾文化財団／Comme de garçons、1993年

『ラグジュアリー ファッションの欲望』 京都服飾文化研究財団・京都国立近代美術館・東京都現代美術館ほか編、2009年

『妹島和世による空間デザイン Comme de Garçons : 東京文化発信プロジェクト ラグジュアリー — ファッションの欲望』 東京都現代美術館編、2009年

『コム デ ギャルソンのためのコム デ ギャルソン展』 会期・会場・出版年不詳
Three women: Madeleine Vionnet, Claire McCardell, and Rei Kawakubo, Fashion Institute of Technology New York, 1987.

Breaking the mode: contemporary fashion from the permanent collection, Los Angeles County Museum of Art, 2006.

Refusing fashion; Rei Kawakubo, Museum of contemporary art Detroit, 2008.

4) 主要な関連単行書

『川久保玲とコム デ ギャルソン』 デイヤン・スジック著、生駒芳子訳、マガジンハウス、1991年

『コム デ ギャルソン』 フランス・グラン著、高橋洋一訳、光琳出版、1998年

『ザ・スタディ・オブ・コム デ ギャルソン』 南谷えり子著、リトル・モア、2004年

『アンリミテッド — コム デ ギャルソン』 清水早苗・NHK番組制作班編、平凡社、2005年

『PEN + コム デ ギャルソンのすべて』 阪急コミュニケーションズ、2012年

『相対性コム デ ギャルソン論 — なぜ私たちはコム デ ギャルソンを語るのか』 西谷真理子編、フィルムアート社、2012年

Future beauty : 30 Jahre Mode aus Japan, hrsg. Catherine Ince u. Rie Nill, München: Prestel, 2011.

Japanese fashion designer: the work and influence of Issey Miyake, Yohji Yamamoto and Rei Kawakubo, ed., Bonnie English, Oxford: Berg, 2011.

5) 定期刊行物特集号

『デザインの現場』「特集 デザインビジネスの新しい流れ — コム デ ギャルソン、JR東日本、INAX」第6巻第36号、1989年8月

『花椿』「特集 コム デ ギャルソン」復刊622号、2002年4月

『Dresstudy』「特集 色で見る川久保玲、ジャン＝ポール・ゴルチエ、ヴィクター&ロルフ」第45号、2004年

『美術手帖』「特集 コム デ ギャルソン — 今こそ、美しき反骨精神を身に着けよ！」第61巻第931号、2009年12月

『ハイファッション』「特集 コム デ ギャルソン自由編集 — '10-' 11秋冬バリ、ミラノ・メンズコレクション速報」第332号、2010年4月

『PEN: with new attitude』「特集 1冊まるごとコム デ ギャルソン — 完全保存版」第16巻第3号、2012年2月15日

6) 映像

「NHK スペシャル 世界は彼女の何を評価したのか — ファッション・デザイナー 川久保玲の挑戦」2002年1月12日放映 (NHK スペシャル公式サイト <http://www.nhk.or.jp/special/detail/2002/0112/>)

「ハイビジョンスペシャル 今 美の変革者が語り始めた — ファッション・デザイナー 川久保玲の世界」2002年5月放映

J. ダニエル・リベスキント (1946- 建築家)

1) 著述

a. 単行書

Symbol and Interpretation. Micromegas, Berlin: Archantic Publications, 1981.

Between Zero and Infinity, New York: Rizzoli, 1981.

Chamberworks, London: Architectural Association, 1983.

Theatrum Mundi, London: Architectural Association, 1985.

Das Daniel Libeskind Projekt, hrsg. Bauausstellung Berlin GmbH Internationale Bauausstellung Berlin, 1987.

Line of Fire, Milan: Electa, 1988.

Marking the City Boundaries, Groningen, 1990.

Countersign, London: Academy Edition/ New York: Rizzoli Edition, 1992.

Radix-Matrix. Architekturen und Schriften, hrsg. Alois Martin Müller, München: Prestel Verlag, 1994.

Radix-Matrix. Works and Writings of Daniel Libeskind, ed. Alois Martin Müller, München: Prestel Verlag, 1994.

Daniel Libeskind, 1995 Raoul Wallenberg Lecture, College of Architecture + Urban Planning, University of Michigan, 1995.

Kein Ort an seiner Stelle. Schriften zur Architektur. Visionen für Berlin, Dresden/Basel: Verlag der Künste, 1995.

Daniel Libeskind and Balmond Cecil, *Unfolding*, Rotterdam: NAI Uitgevers/Publishers, 1997.

Fishing from the Pavement, Rotterdam: NAI Uitgevers/ Publishers, 1997.

Thorsten Rodiek, *Museum ohne Ausgang. Das Felix-Nussbaum-Haus des Kulturgeschichtlichen Museums Osnabrück. Daniel Libeskind*, Tübingen/ Berlin: Ernst Wasmuth Verlag, 1998.

Daniel Libeskind. Jüdisches Museum Berlin. Zwischen den Linien, Vorw. v. Daniel Libeskind, text v. Bernhard Schneider, München: Prestel Verlag, 1999.

Jüdisches Museum Berlin, Dresden, 2000.

Jewish Museum Berlin, Berlin: Verlag der Kunst, 2000.

Leerzeit. Wege durch das jüdisches Museum Berlin, hrsg. von d. Museums-pädagogischen Dienst Berlin, Berlin: Museumspädagogischer Dienst, 2000.

The space of encounter, New York: Universe Press, 2000.

Breaking Ground Daniel Libeskind, Boston: Riverhead Books, 2004. (『ブレイキング・グラウンド 人生と建築の冒険』鈴木圭介訳、筑摩書房、2006年)。

Between, beside, and beyond. Daniel Libeskind's Reflections and Key Works 1989-2014, Singapore: Keppel Land Limited, 2007.

b. 定期刊行物

「スパイラル ダニエル・リベスキント — ダニエル・リベスキント・アーキテク

チュラル・スタジオ」『建築文化』第51巻601号、1996年11月、17-29頁
ダニエル・リベスキント「ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館拡張プロジェクト」〔英文併記〕『建築文化』第51巻601号、1996年11月、20-29頁
Daniel Libeskind. Ein traditioneller Architekt, Benedikt Loderer sprach mit Daniel Libeskind über das jüdische Museum in Berlin, in: *Hochparterre. Zeitschrift für Architektur und Design*, Vol. 11, Dez. 1998, Nr. 12, S. 30.

2) 対談・インタビュー

「インタビュー ダニエル・リベスキント氏 (WTC跡地再開発計画案当選者) — 持ちこたえた地下擁壁を碑に、日常の復活を考えた」(インタビュアー：上西昇)『日経アーキテクチュア』第741号、日経BP社、2003年3月、24-29頁
Counterpoint. Daniel Libeskind in Conversation with Paul Goldberger, New York: The Monacelli Press/ Basel: Birkhäuser, 2008.

3) 定期刊行物特集号

『ユリイカ 詩と批評』「特集ダニエル・リベスキント 希望としての建築」2002年12月

4) 展覧会図録

『Daniel Libeskind major silence』 Gallery MA 運営委員会編、Gallery MA、1994年3月
『ダニエル・リベスキント展 第5回ヒロシマ賞受賞記念：存在の6つの段階のための4つのユートピア』小松崎拓男・小橋祥子編集、インターグループ、トランスネット翻訳、広島市現代美術館、2002年7月
『世界の美術館：未来への架け橋』 ヴィットリオ・マジャーゴ・ランプニャーニ、アンジェリ・サックス、太田泰人監修、TOTO出版、2004年9月
『被爆60周年特別展 そして、未来へ：ヒロシマ賞受賞作家のまなざし』小橋洋子・竹澤雄三・広島市現代美術館編、2005年4月
Daniel Libeskind. Micromegas: architectural drawings, exh. -cat., Helsinki: Museum of Finnish architecture, 1980.
Daniel Libeskind. End space, ed., Alvin Boyarsky, the Architectural Association, exh. -cat., London 1980.
Kristin Feireiss (hrsg.), *Daniel Libeskind. Erweiterung des Berlin Museums mit Abteilung Jüdisches Museum*, Ausst. -Kat., Berlin: Ernst & Sohn, 1992.

5) 映像・オーディオ資料

Potsdamer Platz Berlin, Regie: Christopher Hale, 1 DVD-Video (18 Min.), 1992.
Sachsenhausen, 1 DVD-Video (18 Min.), 1993.
Jüdisches Museum Berlin, 1 DVD-Video (17 Min.), 1993.
Gedanken Gebäude. Daniel Libeskind, Regie: Peter Paul Kubitz, 1 DVD-Video (45 Min.), 1999.
Baukunst 3, 1 DVD-Video (160 Min.), 2003.
Daniel Libeskind. Welcome to the 21st century, directed by Mary Downes, 1 DVD-Video (50 Min.) + 1 Beih. (6 S.), 2005.
Daniel Libeskind. Seismograph historischer Erschütterungen. Der amerikanisch-jüdische Architekt Daniel Libeskind, ein Hörbuch von Moritz Holfelder, 1 CD (ca. 74 Min.) + 1 Booklet, 2010.

本文献表の作成にあたり、以下の文献を参照した：

本永恵子編「大野一雄 関連主要資料」『秘する肉体 大野一雄の世界』大野慶人
監修、クレオ編集・発行、2006年、131頁

後藤洋明編「洲之内徹著作文献目録」『洲之内徹と現代画廊 昭和を生きた目と
精神』展図録、宮城県美術館（和田浩一・加野恵子・小檜山祐幹・菅野仁美）
ほか編、NHKプラネット東北発行、2013年、244-247頁

森山明子編「年譜／作品歴・書誌」『花人 中川幸夫の写真・ガラス・書 — いの
ちのかたち』展図録、三上満良・安藤輝美編、求龍堂、2006年、195-209頁

『土方巽の舞踏 — 肉体のシュルレアリスム 身体のオントロジー』川崎市岡本
太郎美術館・慶應義塾大学アート・センター編、森下隆（土方巽アーカイヴ）
構成・編集、川崎市岡本太郎美術館発行、2003年

『土方巽〔舞踏〕資料集 第1歩』土方巽アーカイヴ編集、慶應義塾大学アート・
センター発行、2000年

出原均編「文献目録」『草間彌生 永遠の現在』展図録、東京国立近代美術館・
広島市現代美術館・熊本市現代美術館・松本市美術館編集・発行、2004年、
250-265頁